交換

_瑠姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
交換

【Ｎコード】
Ｎ９１９６Ｚ

【作者名】
―瑠姫

【あらすじ】
双子の姉妹、莉愛と愛莉。仲のよい姉妹だったのだが…？
一応ホラーだったりします。

第一話　序章

あるところに莉愛(りあ)と愛莉(あいり)というとても仲のよい双子の姉妹がいた。

しかし似すぎていて親でも区別がつかない。

困った親は莉愛にツインテール、愛莉にポニーテールで髪を結った。

「これで区別がつくわ」

大人は皆、一安心だった。

それから１０年の歳月が過ぎ彼女たちは１６歳になった。

「莉愛～愛莉～起きなさい！」

1日はまず母の怒鳴り声で始まる。

『は～い』

それぞれ別のところから返事をしているはずなのに

同じタイミングで返事をする。

これが双子というもの。

2人は諦めつつあるようだ。

『おはよ～』

同じタイミングでこれまたリビングに着たから

母も驚いた。

それに彼女たちはまだ髪を結ってなかった。

「おはよう。コッチが…莉愛？」

「はーずれ！私は愛莉よ！」

そういいながら彼女たちは洗面所に行き

莉愛は２つに、愛莉は１つに髪を束ねるのだった。

しかし莉愛は髪を結おうとしない。

「ねぇ、愛莉。今日数学のミニテストあるのよね～」

愛莉も手を止め返事をする。

「あ、莉愛！あたしも国語のスピーチがあるの」

ソックリな声で会話をする２人。

目をつむって聞いていると同一人物がしゃべっているようだ。

『交換しよ！！』

二人は同時に言ったことについてはあえて何も言わず
髪を結うのを再開した。

ただし

莉愛はひとつに、愛莉はふたつに。

「おはよ～」

彼女たちはこうして

莉愛は愛莉に、愛莉は莉愛になったのだった。

「きり～つ」

【さよーならー】

学校が終わりガヤガヤと帰宅を初める生徒たち。

莉愛は得意科目の国語を愛莉の教室で完璧にこなし

愛莉は得意科目の数学のテストで１００点を取った。

二人の少女はそれぞれ帰宅を始める。

ここから、ズレが始まった。

◆莉愛◆

最近暑くなってきたな

首に汗のせいでくっつく腰までのばしていた髪をかきあげる。

ポニーテールで首にくっつくから嫌よね。

愛莉は大変だ……

そうだ、愛莉を驚かせよう。

シュッとポニーテールをほどき

私は家の帰る道を引き返し

ある店……に急いだ。

◆愛莉◆

シャキン、最後の音が聞こえた。

「終わりましたよ～」

店員が声をかけてくれる。

「これでいいですかぁ？」

「ありがとうございます～」

会計をすまし私は店を出た。

そこから私は借りたいＣＤがあったことを思い出し

店を出た向かいにあるビデオ屋に入った。

第二話　ズレ

◆莉愛◆

『じゃ～んっ！』

帰宅してただいまも言わずにリビングのドアを開ける。

帰ってくる途中に切ってきた髪の毛を披露するためだ。

愛莉は驚くだろうな。

なんてたって腰まであった長い髪を肩まで切ったんだから。

「おかえり莉愛……え！？」

ふふ、やっぱり驚いている！！

そういってダイニングテーブルのところにいた愛莉をみる。

「…えぇぇ！！？」

愛莉の髪の毛は腰までのポニーテール。

…のはずなのだが。

肩までバッサリと短くなっていた。

「なんで莉愛も切ってんの！？」

「愛莉こそ！！驚かせようと思って切ったのに…」

「莉愛も！？私もなのに…」

「え～スゴイ偶然だね！どこの店で切ったの！？私は…」

『〇〇整髪店！！』

私と愛莉は声をそろえて小さい頃から連れて行ってもらっている

パーマ屋さんの名前を出した。

「さすが双子ねぇ」

キッチンからお母さんのため息混じりの声が聞こえてくる。

そうだ、髪を結べなくなったんだから

区別もつかなくなる…

そう思っていたとき愛莉がこっそり私に耳打ちした。

「これからは髪型かえなくても交換できるね♪」

お母さんには悪いけど

全くその通りだと思った。

◆愛莉◆

ビックリした…

莉愛もまさか髪を切ってるとは…

しかも同じ店で！！

あり得ないわ

いくら双子だからってさ～

ん？

でも…

ていうことは…

莉愛にこっそり言った。

「これからは髪型かえなくても交換できるね♪」

莉愛はコクッと小さく笑顔で頷いた。

さっきの撤回！

双子って便利だわ♪

第三話　男

愛莉と莉愛は髪を切ってから

ちょくちょく交換をするようになった。

しかしそれに気づく者など誰も居なかった。

髪型も背も性格も顔も。

全部一緒。

親でさえ区別がつかなくなっていた。

そんななか、事件は始まろうとしていた。

◆莉愛◆

「愛莉…ちょっといい？」

私は今、愛莉として愛莉の教室で愛莉の友達としゃべっていた。

そんななか一人の男に声をかけられた。

誰だコイツ…

そう思い名札をみる。

《浦山達也（うらやまたつや）》

聞いたことあるような…ないような？

でもソイツは私のことを愛莉だと思っているようだった。

なのでなんの警戒もせずに

彼の言うまま着いていった。

ズンズンと私の先を歩く彼。

ピタリと止まったその場所は

屋上へと続く階段の踊り場。

なんでこんなところに？

「どうしたの？こんなばしょで…」

愛莉がコイツと親しいか親しくないかなんてわかんないし

愛莉がコイツを何て呼んでるかなんて知らないから

とりあえずそれだけ聞いてみた。

背中を向けていた彼はクルリと振り返り

口を開いた。

「今度…」

今度?

「今度、俺と一緒に映画行かない?」

顔を背ける達也と呼ばれる人物。

アーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

思い出した！

コイツ、学年一のモテ男クンだーーー！！

「ん…と」

愛莉らしく、愛莉らしく

心の中でずっと唱えていると

冷静になれた。

「デートってことかな？」

笑顔を作って聞く。

コクリと頷く達也。

その笑顔が引きつる。

始業のチャイムが鳴る。

「とりあえず…返事は後でいいよ…」

小さい声で言って教室に戻り始める達也。

私も階段を下り始める。

なんでなんで

達也は愛莉が好きなの？

学年一モテる達也が！？

愛莉もモテるの！？

意味わかんない

けど

わかる

誘われたのは愛莉だけど

それを知ってるのは私だけ。

とりあえず私は愛莉として…

授業を受けるため教室に戻った。

第四話　爆弾は丁重に。

◆愛莉◆

「愛莉？ちょっといい？」

部屋の扉が開く。

莉愛だ。

「ん～？どしたの、莉愛」

私と莉愛の部屋は隣同士で

時々莉愛が私の部屋に来る事もあった。

なんてったって莉愛の部屋は汚い。

汚い、という言い方は悪いかもだけど

ぬいぐるみとかポスターとか服とかでいっぱい。
そのうえピンクなものしかないから目が疲れる。
勉強道具はどこにしまっているんだ、って感じ。

そんな事を考えてると
莉愛が私の隣にちょこん、と座る。

「愛莉、達也って知ってる？」

私の目をじぃっと見つめそう言う莉愛。

「は？」

「達也！愛莉と同じクラスでしょ！？」

「うん、まぁ…」

なにをいきなり言ってるんだろう。

達也は確かに同じクラス。

突然出された男の名前に何かあるんじゃないかと

脳みそフル回転で考える。

「ソイツと仲いいの？」

ちかくにあった雑誌を手に取り

ぱらぱらとめくりながら聞いてくる。

「う～ん、仲いいわけではないけど…なんで？」

いきなり部屋に来て雑誌読んで達也のこと聞いて

莉愛は何したいの？

「ふぅん…まぁいいや！」

バサッと雑誌を放り投げる莉愛。

「ちょっとぉ、人の本乱暴に扱うなっていつも――――」

「あ、明日も交換しよ。」

言葉を途中で切られた上にお願いするとは…

ふてぶてしい奴だ！！！

しかし明日は私も理科の実験の結果をまとめて発表する授業があったりする。

「…いいよ、バレないようにね！」

「愛莉もねっ！！」

そういって部屋の扉を乱暴に閉め自分の部屋に戻る莉愛。

結局達也がどうしたの？

どうでもいいけどさ…

最近、自分のクラスにいることより
莉愛のクラスにいることのほうが多かったりする。
不便だったり面白かったり。

でも…私は愛莉…だか…ら…

そう考えながら私は眠りについた。

第五話　雄叫び

◆莉愛◆

呼び方は、達也（たつや）。普通に呼び捨て。

あまり親しい関係ではない。

小さいノートにそれを小さ〜くメモした。

「ふぅ…」

愛莉がまさかあの達也にデートに誘われるとは…

有り得ないけれども。

有り得てることだから、受け入れるとして。

まだ、愛莉に達也にデートに誘われた事は言ってない。

愛莉が誘われたんだから愛莉に報告して愛莉が行くべきなんだろうけど。

まだ、言うべきときではない。気がする。

愛莉にいきなり達也のこと聞いたから怪しんでると思う。

もしかしたら明日、達也に直接聞くかもしれない。

だから、明日も交換する約束をした。

ノートをスクールバッグの奥にしまい、

ピンクのモフモフのベッドにダイビング。

「はぁあああ〜」

大きなため息をつく。

学年一モテる達也(たつや)がまさか…

私の家族と付き合う!?

「がぁぁぁぁぁぁあ!!!」

ため息にしては大きすぎる…雄叫び(?)を上げ

「うるさい!!」

と下のリビングからお母さんの声が聞こえた。

しかしそれもあんまり気にしない。

ダメだ。

愛莉と達也が付き合うなんて…絶対ダメ！！！

愛莉は調子乗るに決まってる！！

自慢するに決まってる！！

絶対・断固・全力で

阻止する！！

とりあえず私は愛莉として明日も過ごすため

A組の明日の授業の教科書をスクールバックに詰め込んだ。

第六話　B組での出来事。

◆愛莉◆

最近は私が莉愛で莉愛が愛莉。

ってな感じになってしまっている。

A組の私はほとんど莉愛のB組にいる。

授業進度もほとんど変わらないから授業も理解できるし、

莉愛の周りの人にも気づかれていない。

莉愛の友達ともそれなりに莉愛のときと変わらない関係を維持してる。

莉愛が私になってるときに達也(たつや)と何かあったのかも知れないけど

まぁたいしたことではないだろう。

私も莉愛になりすましているときに何にも起こらない。

莉愛と仲のいい友達2人と一緒にいる。

香野詩織(こうのしおり)ちゃん、莉愛はしーちゃんと呼んでる。

市川麻友(いちかわまゆ)ちゃん、莉愛はまゆと呼んでる。

この2人と私はトイレに行ったり移動教室したりしてる。

何にも起こらない。

まぁ、私が愛莉でいるときもそうだったけど。

「リア、次体育だよ？」

…愛莉として考え事してるときに「リア」と呼ばれたもんだから

ビビったけど…

体育着を持ち

2人を追いかけ

教室を出た。

第七話　導火線に火を

◆莉愛◆

「達也(たつや)っ」

授業が終わり、放課後。

外は雨。

ココはA組。

愛莉の、教室。

そして私は莉愛。

私が呼んだのは達也。

達也は友達と帰宅しようと教室の扉まで行った所だった。

そこを私が呼び止めたもんだからちょっと罪悪感。

しかし達也と帰ろうとしていた俊吾(しゅんご)が

気を遣ってくれたのか1人で帰るといい、

達也は私のところに小走りできた。

ちなみに俊吾とは去年同じクラスであったりする。

まぁ、どうでもいい。

「おっ…あっ…愛莉…？」

「あっえっと、この前の話なんだけど…」

達也が慌てるところなんて始めて見た。

しかし教室の隅でヒソヒソとしゃべる声が。

「なんなの愛莉…ウチらのたっつんに…」

「ブスが…調子乗ってんじゃないわよ」

教室の中で大きい声で読んじゃったから

ちょい反感買ったっぽい。

あの追っかけ隊に…

あ、そうそう。達也はご存知の通りモテるから

ファンクラブがあるんです。

学年で目立つギャル系の子はクラス関係なく入っていて

それに入っている人が達也に話しかけると異端となり

いじめられたりハブかれたり。

入っていない人が話しかけると入ってる子に
いじめられたりハブかれたり。
【たっつん】なんて勝手にニックネームをつけちゃったりしてる。
気持ち悪い。
もちろん愛莉も私もファンクラブには入っていない。

そんなことを考えていると達也に手を握られた。

「ココだといろいろ言われるから…ね」

そういって手を握ったまま
階段の踊り場まで走っていった。

「スゴイファンだね」

ちょっと嫌味。

なんであんなにいるのに愛莉なんか選ぶの？

「いや…で、この前の話…」

私はそのことを思い出しパッと笑顔を作った。

「あ、いいよ。映画。行こうかっ！」

少しの沈黙。

「…マジですか！！？」

それは達也の嬉しさ爆発！って感じの声で破られた。

「いっいつにする！？」

「え…いつでも？」

そんなはじめてみる達也にちょっと戸惑いながら返事をしていく。

こうやって改めてみるとやっぱり美形（イケメン）ね…

長いまつ毛も白い肌も。

あれだけファンがいるのもわかる気がするわ～

いつもはクールって感じなのに

目の前でキャイキャイとはしゃぐ達也を見て

なんかボーっとしていた。

適当に受け答えして

達也の言う事を聞き流していたら

９月１５日土曜日の午前１０時に映画館前で待ち合わせ。

「見る映画は俺が決めていい？」

「うん。」

という会話をしたらしく

当日まで決めておくといわれた。

「じゃあ…楽しみにしてるから」

そう言い達也は帰っていった。

無言で手を振る私。

約束…しちゃったよ！！

愛莉じゃないってこと、気づいてないの？

馬鹿なんじゃないのあの男は！！！

気づきなさいよ！！！

もういい、デート当日も私が行く。

愛莉として、デートやりきってやる！！

はりきりながらズンズンと階段を降りて

ズンズンと家に帰った。

第八話　ブランドの服と変化

◆愛莉◆

「ただいまぁ」

玄関から響くその声。

莉愛だ。

「お帰り！遅かったね、どこいっ……」

リビングにいたので玄関まで出てみると

いつもの莉愛。

ただひとつ、違和感。

「なにその袋？」

スクールバックを持ってる反対の手で持っていたのは

ショップの袋。

しかも有名ブランド店のじゃないですか！！！

「ん～？ちょっと買い物してきたの…あ～いいにおい！」

パタパタと横を通り過ぎてキッチンに向かい

今日の夕飯のエビフライを口にくわえ

莉愛は自分の部屋に向かって

階段を駆け上がっていった。

最近莉愛は変だ

気づいていないと思うなよ

生まれてからずっと一緒にいたんだもの。

莉愛のことならわかる

髪を切ってからおかしい。

達也のこと。

ブランド服のこと。

交換する回数。

莉愛…

妹が通り過ぎた廊下に

何か落ちていることに気づいた。

それは、一枚の紙だった。

『呼び方は、達也。普通に呼び捨て。
あまり親しい関係ではない。』

と書かれた紙の裏をピラリとめくると

『９月１５日土曜日。午前１０時映画館前で待ち合わせ。
見る映画……達也が決める。』

…なにこれ……

莉愛の…だよね

莉愛が私に達也のことについて聞いてきたのって

コレに関係あるの？

とりあえず見てはいけないものを見た気がして

紙は４つに折って制服のスカートのポケットに入れた。

「ふふ…っ」

思わず漏れた笑。

これから起こること

「楽しみ…」

ぼそりとそう呟き
私はリビングに戻った。

9月15日。
何にも予定はない。

莉愛…

隠そうとしたってわかるから。

だって私たちは

双子なんだもん。

第九話　本当の恐怖

運命の日９月１５日。

今日は本当の恐怖の始まりになることを、２人の少女はまだ、知らない。

◆莉愛◆

ジリリリリッ

いつもはウザいとしか思わない目覚まし時計の音も

あっさりと止め

ベッドから起き上がる。

「ふぁ～あ……」

そう。今日はなんと

達也(たつや)とデートッなのだ！！

でも私は私として行くわけではなく

愛莉としていかなければならない。

クローゼットにかけてある買ったばかりのピンクのワンピースを

手に取る。

それと一緒にめちゃくちゃ高かった靴とバッグも。

お小遣い、３ヶ月分くらい貯めてたの一気に遣っちゃいました…

でも、これも愛莉と達也を引き離す大作戦のため！！

軽くなった財布とハンカチやティッシュ、鏡などをバッグに入れた。

◆愛莉◆

「おはよ〜う！！」

勢いよくリビングのドアを開けたのは、莉愛。

身につけているのはこの前のブランド物のワンピ。

「あれ、そんな服持ってたっけ？」

お母さんが莉愛に聞く。

「え、買ったの。お小遣いで買ったんだからいいでしょ？」

高いブランドの服だとも知らないお母さんは

「ふーん」と軽い返事をしただけでそれ以上なにも聞かなかった。

「あ、愛莉、お母さん、今日私帰り遅くなるからぁ！」

「どっか出かけるの？」

「うん。友達と遊ぶの～」

そういいながら莉愛は朝ごはんを食べるためテーブルに座る。

「へぇ、誰と遊ぶの？」

…達也とでしょ。知ってるんだからね

その言葉を飲み込み笑顔で聞く。

しかし莉愛は迷う事なくこう答えた。

「しーちゃんとまゆ～」

目玉焼きにしょうゆをかけながら軽くいう莉愛。

もしかしたら、達也とのデートは、中止？

「何処に行くの？」

「ん？映画だよぉ」

…

わざと映画を選んだの？

ほんとは映画観に達也と行くんじゃないの？

ほんとに詩織ちゃんと麻友と行くの！？

隠すあたりがマジムカつく。

「…そう。ごちそうさま」

怒りを抑え食べ終わった食器をキッチンに持っていく。

「愛莉は？何もないの今日？」

お母さんが聞いてくる。

今日は特になにもないが…

…

いいこと、思いついた。

「私も今日友達と遊ぶから…」

そう答えて私は出かける準備をするため部屋に戻った。

そのときはもう、怒りは消え余裕さえ生まれていた。

第十話　準備

◆莉愛◆

「私もごちそうさま～」

愛莉が先に部屋に戻ったので私もお母さんと2人で居づらくなり食器を片付け始めた。

「詩織ちゃんと麻友ちゃんによろしくねぇ」

茶碗洗いをするお母さんが私に言う。

「…うん」

短く返事をするとリビングから出た。

お母さん、ごめんね。

今日は達也とデートなの。
それも、愛莉になりすまして。

でも、マズいことが起きた。
愛莉も友達と遊ぶだって！？
街に出てるときに私たちとか麻友たちにあったらどうしよう。
とりあえず私は愛莉のフリをしなきゃ…
達也にバレないことが最優先だ。

私はトイレに駆け込み携帯を開いた。

「もしもし麻友！？今日私としーちゃんと遊ぶってことにしてくれない！？……
え、しーちゃんと麻友2人で遊ぶの！？　ならちょうどいいや。しーちゃんにも言っといて！」

『了解〜☆そのかわり後日なんかおごってよ？』

そう言いブツっと電話を切る。

しーちゃんと麻友はこういうとき何も聞かずに了解してくれる。

ありがたい…

これで、愛莉が麻友やしーちゃんに会っても大丈夫だ。

問題は、ウチらと会ったときだ。

焦る表情をできるだけ隠し愛莉の部屋をノックする。

「愛莉〜？」

「うん？なに？」

部屋に入ると愛莉は今日着ていく服を選んでいるようだった。

「今日どこに遊びに行くの？」

これの返事によって愛莉とウチらがあうかどうか決まる。

「ん～とねぇ友香（ゆうか）の家に行くの～」

着替えながらいう愛莉。

「どっかに遊びに行かないの？」

できるだけさりげなく、聞いてみた。

「うん。友香（ゆうか）風邪気味だって言ってたし～今日新作のＤＶＤ見させてもらうだけだから」

よかったぁぁ！！

心の中でガッツポーズ。

ちなみに友香（ゆうか）とは愛莉（あいり）の友達。

私が愛莉になりすましているときも気づかずに私と仲良くしていた。

これで、愛莉とウチらが会う確率は０％に等しい！！

「そう…私もう出かけなきゃだから行くね！」

部屋を出た。

ブランドバッグを手に持ち時計を確認する。

９時２０分。

映画館までは徒歩２０分もあれば着く。

「お母さん～莉愛（りあ）行って来るねぇ」

「行ってらっしゃい～、５時までには帰ってくるのよ？」

高めの靴を履き家を出る。

私はもう、愛莉になりきっていた。

憎と恨と羨

◆愛莉◆

莉愛(りあ)はもう出かけた。

フン、わかってんのよ？

麻友と詩織と遊ぶなんて嘘なんでしょ？

だから、私も嘘をついた。

友香と遊ぶ

なんて…

友香は私と仲のよい友達。

でも風邪気味で学校は休んでる。

だから遊べるはずなんてないのよ

でも莉愛が先に嘘ついたんだからね？

私はチェックのスカートにタイツ、ジャケットを身に付け

鏡の前でクルリと一回、回った。

「ふふっ」

自然と笑顔が漏れる。

楽しみで仕方がない。

莉愛は私の妹だね。

生まれてきたときからずーっと一緒だったね。

私に初めて嘘をついたね。

でも、その嘘もすぐ見破られたね。

そして達也とのデートもめちゃくちゃにされるね。
そのときの莉愛はどんな表情(かお)をするんだろうね…

莉愛の達也に捨てられるときの顔を想像し
もう一回笑顔を作ると
バッグを手に持ち部屋を出た。

「お母さん？愛莉(あいり)も行ってくるから…」

「はーい、5時までには帰ってきてね」

茶色のブーツを履き玄関を飛び出す。

外は清々しい空気だった。
深呼吸を一回して空を見る。
青空ね。莉愛。

絶好のデート日和で喜んでることでしょうけど

絶好のデートを壊す日和でもあるから。

憎い。

妹が。

笑顔で人のクラスに乗り込んでそのクラスのモテる男とデートする

莉愛が。

達也は莉愛の何処(どこ)がいいのよ！？

あんな女…ッ

一人で歩いている私を哀れだと思ってるんでしょ？

友香しか遊ぶ相手が居ない根暗だと思ってんでしょ？

よっぽど怖い顔をしていたのか
前から来たギャル男が一歩私から遠ざかり
焦った顔をして急いで通り過ぎていった。

「ふふっ」

笑顔でいなきゃね。

これから始まるのは

私の逆襲撃。

天国から一気に

地獄に落としてあげる…莉愛。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9196z/

交換

2012年1月5日17時53分発行